

機関番号：13601

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009 ~ 2010

課題番号：21720194

研究課題名 (和文) 処理可能性理論に基づく英語ライティングタスクの妥当性に関する研究

研究課題名 (英文) Validating L2 Writing Tasks on the Basis of Processability Theory

研究代表者

酒井 英樹 (SAKAI HIDEKI)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：00334699

研究成果の概要 (和文)：

本研究の目的は、処理可能性理論の点からライティングを評価するための同期型コンピュータ媒介コミュニケーションタスクを制作し、その妥当性を検討することであった。まず、ライティングタスクを Internet Explorer 上で操作できるようにした。次に、タスクが処理可能性理論で扱われる文構造を誘出することを確認した。最後に、スピーキング及びリスニングタスクとの併存的妥当性を検討したが、高い妥当性を主張することはできなかった。

研究成果の概要 (英文)：

The purpose of this study was to develop and evaluate L2 SCMC tasks in terms of processability theory. First, the results showed that the tasks developed for this study elicited structures which were targeted within the framework of processability theory. Second, the correlations among the performance on the SCMC tasks, speaking tasks, and listening tasks did not suggest sufficiently high concurrent validity.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：人文学・言語学・外国語教育

キーワード：英語教育学 第二言語習得理論 処理可能性理論 ライティング コンピュータ

1. 研究開始当初の背景

学習者の第二言語がどの程度発達しているのか評価することは、教育の点からも研究の点からも重要である。教育の効果を検討するために、教師は学習者の第二言語の熟達度について情報を得る必要がある。また、第二言語習得研究の領域において、特に横断的な研究を行う際に、学習者を熟達度の点から上

級者と下級者に分けて研究を進めることが多い。第二言語の熟達度の評価については、4技能（リーディング、リスニング、スピーキング、ライティング）の点からそれぞれ研究が行われているが、本研究では第二言語の熟達度をスピーキングやライティングなどの表出能力の点から評価することについて焦点を当てる。

表出能力の評価について以下のような点が指摘されている。スピーキングやライティングの評価規準（例、ESL Composition Profile, Jacobs et al., 1981）を使って、熟達度を評価することが多い。これらの評価規準では、文法的正確さは直線的に高まるという想定のもとに作成されている。ところが、第二言語を流暢に使いこなせる上級者であっても、下級者よりも文法的正確さに欠ける場合がある。これは第二言語習得の過程で上級者は難しい文法構造を使う機会が増えるのに対して、下級者は正確に扱える文法構造しか使わないことがあるためである。そのため、評価規準が第二言語習得の研究成果を踏まえていないというのである（Pienemann, Johnston, & Brindley, 1988）。

そこで提案されているのが、第二言語習得に基づく熟達度評価（acquisition-based procedure for second language assessment）である。第二言語習得の発達段階に関する理論として、処理可能性理論（Processability Theory）が提案されている（Pienemann, 1998, 2005）。処理可能性理論が、日本語話者である英語学習者にも応用できるかどうかという点から、大学生の英語学習者のスピーキングが分析されている（Sakai, 2004, 2008）。その結果、日本語話者である英語学習者に対しても処理可能性理論は妥当であるという示唆が得られている。そこで本研究では処理可能性理論に基づいて研究を進めた。

処理可能性理論に基づいて、スピーキング力の評価を行う試みが発表されている（Mackey, Pienemann, & Thornston, 1991; Pienemann, Johnston, & Brindley, 1988）。しかし、スピーキングの点から熟達度を評価することは、スピーキングを録音し書き起こす場合にはテスト実施から評価までに時間がかかる、その場で評価者がスピーキングを聞いて評価を行う場合には学習者に応じた大人数の評価者が必要でありさらに評価者の訓練が必要になる、という問題点がある。つまり、時間や手間がかかるのが実際上の問題として指摘されている。本研究では、この問題点を解決するために、同期型コンピュータ媒介コミュニケーション（Synchronic Computer Mediated Communication, SCMC）を用いたライティングタスクを活用して、評価システムを開発しようとするものである。

コンピュータ媒介コミュニケーションには、同期型と非同期型の2種類がある。そのうち、同期型コンピュータ媒介コミュニケーション（synchronous computer-mediated communication, SCMC）は、筆記コミュニケーションと口頭コミュニケーションの両方の特徴を持つといわれている。特に、インタラク션을重視する第二言語習得研究に

おいては、SCMC が、第二言語習得を促進する意味の交渉（negotiation for meaning）を生じさせるという点で、SCMC は注目を集めている。一方で、筆記コミュニケーションの特徴として記録が容易であるという点が指摘できる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英語の熟達度を評価するためのライティング・タスクを開発し、その妥当性を検討することである。理論的基盤として Manfred Pienemann の処理可能性理論を援用する。また、同期型コンピュータ媒介コミュニケーション（Synchronic Computer Mediated Communication, SCMC）を用いたライティング・タスクを活用し、評価システムを開発しようとするものである。

3. 研究の方法

開発した SCMC タスクの妥当性を検討するために、まず、SCMC タスクが処理可能性理論で扱われる文構造を誘出するかを検討した。

本研究で対象とした、処理可能性理論で扱われる文構造は、次の通りである。

- ① Cancel-Inversion
- ② Aux-2nd
- ③ Do-2nd
- ④ Pseudo-Inversion
- ⑤ Yes/no-Inversion
- ⑥ Do-Fronting
- ⑦ WH-Fronting
- ⑧ Adverb-Fronting
- ⑨ don't+V
- ⑩ SVO?
- ⑪ SVO
- ⑫ no/no+X
- ⑬ words?
- ⑭ words

この検討のために、熟達度の異なるペア3組のタスクパフォーマンスが分析された。

次に、SCMC タスクが併存的妥当性を持つのかを検討した。日本語話者英語学習者である大学生30名を対象に、(a) SCMC のライティング・タスク、(b) スピーキングによる口頭タスク（Sakai, 2004, 2008）、(c) リスニングテスト（Sakai, 2005）を実施した。また、熟達度を測定する外部指標として TOEIC-IP テストを実施した。機械及び実験手続きの不調により欠損値のある8名を除き、22名を分析対象とした。この分析では、2回出現基準を採用した。

4. 研究成果

(1) SCMC の開発

まず、Sakai (2004, 2008) など で用いられたタスク（インフォーマル・トーク、間違い

探しタスク、絵描写タスク、ディスカッションタスクなど)を Internet Explorer 上で利用できるようにした。このタスクは、Windows Live Messenger でつながれた2台のコンピュータを利用して、ペアによって実施される。タスクは、情報の流れ(一方向・双方向)、焦点(拡散的・焦点的)、言語(開放的・閉鎖的)の点から、さまざまな種類の言語使用を求めるものを用意した。このタスクの詳細は、Developing L2 Synchronous Computer-mediated Communication Tasks という論文にまとめられ、現在投稿中である。

(2) SCMC タスクの内的妥当性

次に、そのタスクを基にしたライティングデータを日本人英語学習者である大学生から収集した。3組のペアによるライティングパフォーマンスを分析した結果、処理可能性理論で扱われている文構造を誘出していることが確認された(表1参照)。

表1. Processability Theory Analysis

	Dyad 1		Dyad 2		Dyad 3	
	A	B	C	D	E	F
<u>Stage 6</u>						
Cancel-INV (attempt)				1		1
<u>Stage 5</u>						
Aux-2nd	3	2	3	2	1	2
don't+V	2	3	2	1	7	5
<u>Stage 4</u>						
Pseudo-INV	3		2		1	1
Yes/No-INV	14	17	6	5	1	1
<u>Stage 3</u>						
ADV	1	1		1	2	
Do-Front	3	5	1	1	1	
WH-Front		1				
<u>Stage 2</u>						
SVO	57	30	49	48	41	41
SVO?	4	3	1	2	1	1
<u>Stage 1</u>						
Formula	2	1	2	2		
Formula?	1	2		1		2
no	2	6	4	3	4	3

no+X		2	1			
words	63	64	14	16	20	15
words?	14	17	4	4	1	3

また、合わせて、意味の交渉(negotiation for meaning)が生じていることや、SCMCに特有の特徴(顔文字や大文字の使用、複雑な会話取りなど)が観察された。以下の例は、顔文字(1009, 1010)や強調(1012)が見られるやり取りである。

- 1009 Mai good morning:)
- 1010 Sayo good morning^^
- 1011 Sayo how are you?
- 1012 Mai soooo fine! how about sayo?

この研究結果は、Examining L2 Synchronous CMC Tasks for Assessment of Online Language Production という論文としてまとめられ、現在投稿中である。

(3) SCMC タスクの併存的妥当性

最後に、まず、SCMC のパフォーマンスをもとに、2回基準による発達段階の特定を行った結果、Stage 5 が 17人、Stage 4 が3人、Stage 2 が1人であった。この発達段階と他のタスクによる発達段階の特定を比較した結果、全体的には明確に高い併存的妥当性を主張する結果とならなかった。スピーキング・タスクによる発達段階においてはあまり相違が見られなかったが、リスニングテストによる発達段階との関係は低かった。

教育的応用性の観点から SCMC のタスクを学習者同志のペアで行わせたため一人あたりのデータ量が少なくなってしまった点と理解と産出という認知プロセスの違いがある点から考察された。今後は、ライティングタスクの実施の仕方や時間を考慮する必要がある。

併存的妥当性の研究成果については、Validating the Use of SCMC Performance for a Processability Analysis として、学会発表する予定である。

本研究の学術的な意義は、第二言語習得の研究において、処理可能性理論の妥当性の検討がスピーキングを対象に行われてきたが、モダリティーが異なっても(ライティングにおいても)、その妥当性が示唆されたことである。また、教育的な意義として、英語学習者の熟達度の評価方法に示唆が得られたこと

である。コンピュータの普及により、各種学校においてコンピュータを用いて授業を行うことが多くなった。本研究の成果は、英語の授業において簡便に学習者の熟達度を評価することに示唆をもたらすものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

酒井 英樹. (2011). Validating the Use of SCMC Performance for a Processability Analysis. 2011 年 6 月 25 日・26 日 第 41 回中部地区英語教育学会・福井大会 (福井大学) 発表

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井 英樹 (SAKAI HIDEKI)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：00334699